

淀城二ノ丸の石垣

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



検出した二ノ丸石垣 (南東から)

淀城の歴史 京阪電車淀駅を出て南西方向へ少し進むと本丸や天守台・石垣・堀が残る淀城跡公園があります。淀城には、豊臣秀吉が淀殿の産所として築城した淀古城と、江戸時代の淀城の2つがありますが、現在跡地として残っているのは後者です。

淀は、宇治川・木津川・桂川の三川が合流する地点です。京都と大阪を繋ぐ交通や海産物・塩の陸揚げを集積する商業、また軍事的な要衝としての役割を持っていたことから古くから重要視されており、徳川幕府にとっても同じく重要な場所でした。そのため徳川2代将軍秀忠の命を受けた松平定綱

が淀藩に所領3万5千石で入部し、して元和9年(1623)から寛永2年(1625)にかけて築城しました。城を、京都を守護するための城と江戸時代中期の書物『淀古今真



『淀城大絵図』部分 (○が調査地点) 所蔵：京都大学大学院工学研究科建築学専攻



調査区全景（北西から）



矢穴跡を残す割石（東から）

『佐子』には、廃城となった伏見城の資材を転用したことや、二条城の天守が移築されたことが記されています。松平定綱以降、永井尚政、石川憲之、戸田光熙、松平乗色、稲葉正知といった譜代大名が居城しました。宝暦6年（1756）には落雷により天守など城内の多くの建物が焼失し、天守は再建されることはありませんでした。

また、淀城は江戸幕府の軍事的拠点として築かれたにもかかわらず、島羽伏見の戦い（1868年）の際に幕府軍の入城を拒み、結果的に新政府軍の勝利に一役を買ったこととなりました。明治維新後、廃

藩に伴い淀城も廃城となり、石垣の石材も淀川や木津川の河川改修工事などのために多くが取り去られて現在に至ります。

二ノ丸の石垣 これまでの発掘調査の成果や現存する天守台、江戸時代中期に描かれた絵図『淀城大絵図』などを元に淀城の復元が行なわれ、この復元案を参考に2018年に二ノ丸の存在が推定される位置で発掘調査を行なったところ、その東限を画する石垣と堀を発見しました。

今回の調査で発見した石垣は、南北約17m、高さは約1.4m、主軸方位は北に対して約11度東に振

れています。石垣の高さに関しては、上部が2石ほど抜き取られていることや基底部が確認できていないことから全容はわかりませんが、少なくとも4mはあったのではないかと考えています。

検出した主な石材35石の内、9石で石材を割るために穿った矢穴跡を確認し、その矢穴跡の形が慶長期前半（17世紀初頭）の特徴を示していることが分かりました。この時期は伏見城築城の時期と重なります。つまり、淀城二ノ丸の石垣は松平氏による淀城の築城時に新調されたものではなく、『淀古今真佐子』にあるように伏見城の廃城石を転用した可能性が高いと考えられます。また、この石垣には補修や改修を行なった痕跡が認められないことから、築城時からその場所を変えていないといえます。

本丸や天守の石垣も同じように再利用された可能性が指摘されています。今回検出した石垣に用いられている石材は黒雲母花崗岩と呼ばれる白色系の石材が大半を占めるのに対して、本丸や天守台の石垣に用いられている石材には、鞍馬・嵐山、加茂・笠置、山科、宇治、白川、六甲など多くの産地や種類が確認されています。また、二ノ丸の石垣は、刻印や墨書が全く確認されていないのに対して、本丸・天守台の石垣では多数の刻印や墨書が確認されていることなどの差異が存在しています。こうした違いが何に由来しているのかについては今後の調査や研究の課題です。（松永修平）